

# 「保育表現技術 (音楽 1)」

## —読譜 5—

河合 玲子・白石 朝子

### “Early Childhood Education Expression Skills (Music 1)” —on Reading Music V—

Reiko KAWAI and Asako SHIRAISHI

#### 1 緒言

本学短期大学部に保育学科が開設されて以来、「保育表現技術 (音楽 1)」(以下「音楽 1」)では、ピアノ演奏技術の取得や向上には「読譜力」が必要なスキルと捉え、授業目標の一つとして「読譜力の育成」を掲げている。その取り組みとして、1クラスを2つのグループに分け45分交代でピアノ個人指導とクラス授業を行い、クラス授業では「音楽理論<sup>1)</sup>」を学習し、そのどちらにおいても学生全員に「読譜力」の必要性を喚起し指導を行ってきた。

履修学生の読譜力調査として、平成22年度より入学時に「読譜力意識調査アンケート<sup>2)</sup>」(以下「意識調査」)と、「ト音記号譜・ヘ音記号譜読譜テスト」<sup>3)</sup>(以下「読譜力調査」)を行い、特に読譜が苦手な学生に対する指導法の実践研究を続けている。

平成22年度と23年度は、ピアノ個人指導の待ち時間を利用してマンツーマンの読譜指導を行った。また23年度は、それまで1年次前期開講の「音楽 1」だけで行ってきた読譜指導を、引き続き1年次後期の「保育表現技術 (音楽 2)」(以下「音楽 2」)でも行うことにした。

「読譜力調査」で抽出された「読譜力」の苦手な学生の多くは、学期末で行う「音楽理論」の試験結果でも理解度が低かった。「読譜力」を苦手とする学生にとり、大勢でのクラス授業では音楽理論に対する理解度の差を埋める時間的な余裕もなく、最後まで問題を抱えたまま終わる学生も少なくない。この問題を少しでも改善するため、平成24年度より、ピアノ個人指導と音楽理論の学習をともに少人数のグループ指導で行うことにした。これにより、それまで読譜の苦手な学生を選んで行ってきたマンツーマンによる読譜指導から、授業担当教員9名がグループ授業の中で読譜についても指導を行うこととした。

指導方法については、各教員が自由な発想で展開させた。授業終了後に各教員の指導をまとめた結果、「線と間」<sup>4)</sup>、「読譜フラッシュ」<sup>5)</sup>、弾き歌いや伴奏づけでコードネームに反応できるよう読譜の際に「英米音名も合わせて学習」のおおむね3つの指導法に分けることができたが、これについては『「保育表現技術 (音楽 1)」—読譜 4—』(『名古屋女子大学紀要 (人文・社会編)』第60号: 145-157、以下「読譜 4」)にて報告されている。

本論では、この「読譜 4」の研究成果より「線と間の指導法」<sup>6)</sup>と「読譜フラッシュ指導法」<sup>7)</sup>を全学生に波及させるとともに、特に読譜が苦手な学生に対して指導を行うことで、どのような効果がみられたのかについて調査・分析し、考察を行いたい。

## 2 読譜力調査

読譜の苦手な学生を選出するために、今年度の入学者175名<sup>8)</sup>を対象に「読譜力調査」<sup>3)</sup>を行った。また、読譜力の推移を知るために同じ問題で授業終了時に「読譜力調査」（以下「終了後調査」<sup>9)</sup>）を実施した。以下、詳細な方法と調査結果を報告する。

### （1）方法

調査は、平成27年4月14日（火）「音楽1」の初回オリエンテーション時に実施した。対象は「音楽1」1年生履修学生、計175名である。学生にはト音譜表20問、ヘ音譜表20問の読譜問題をそれぞれ1分間の制限時間内に解答させた。問題用紙にはト音譜表でヘ音（カタカナ表記）から三点ホ音（一点二音を除く）、ヘ音譜表で一点い音から一点ト音（と音を除く）が順不同に記されている。

### （2）結果

読譜力調査の結果は、表1の通りであった。

ト音譜表は、16問以上正解した学生が94名（53.7%）と半数以上になり、そのうち満点の学生は53名（30.2%）であった。その一方で正解数10問以下の学生が34名（19.4%）と約2割いることがわかった。またヘ音譜表では、16問以上正解した学生は32名（18.2%）であり、そのうち満点であった学生は12名（6.8%）と少なかった。その一方で正解数10問以下の学生が85名（48.5%）と半数程度を占めており、なかでも正解数6問以下の学生が43名（24.5%）となり、読譜力の育成が求められる結果となった。

この結果を踏まえ、ピアノの個人レッスンの待機時間を利用して音符カード<sup>10)</sup>にて音の位置を覚えさせ、「楽典」のグループ授業の際に短時間で指導できる「読譜フラッシュ指導法」を全学生対象とした。また特に読譜の苦手な学生へは、「線と間による指導法」も行うこととした。

表1 読譜力調査の結果

読譜正解数	ト音譜表	ヘ音譜表
6問以下	9名	43名
7問以上10問以下	25名	42名
11問以上15問以下	47名	58名
16問以上20問以下	94名	32名
合計	175名	175名

## 3 指導法Ⅰ

### —全学生を対象とした指導—

#### （1）目的

保育学科の学生は、短大卒業後、幼稚園教諭や保育士となって現場に出ると、ピアノを弾くことを要求される。そこでは短時間で曲を仕上げ、また臨機応変に対応することが求められるであろう。演奏するためには様々な能力が必要であるが、楽譜を見て瞬時に正確に音符を読み取る力、読譜力は必要不可欠である。今年度の読譜力調査<sup>3)</sup>により、学生の読譜力には大きな差異のあることが明らかになった。読譜力の低い学生に対してその力を身に付けさせることはもちろん、読譜力の高い学生にもその力を維持しつつ、更に伸ばせるように指導を行い、学生全体の読譜力向上を図る。そのために、本指導では瞬時に音の判別ができる訓練を行い、正

確な読譜力を習得させることを目的とした。

## （2）方法

「音楽1」では本学科非常勤講師を含めた9名の教員で約5名ずつの少人数グループで指導を行っている。今年度は、1年履修学生175名を対象に授業の内10回を利用し、音符カード<sup>10)</sup>を用いて指導を行った。指導には、ト音カード21枚とヘ音カード21枚の計42枚を使用した。まず授業の最初に、各教員は数枚の音符カードを学生に提示し、提示したカードの音名を階名<sup>11)</sup>で素早く答えさせた。次にグループ内へ翌週提示する予定の音符カードの貸し出しを行い、ピアノ個人指導の待機時間を利用して音の位置を覚えさせた。そして翌週に同じカードを見せて、瞬時に答えられるかを確認した。授業で扱った音符カードの順番は、表2のとおりである。

第1回から第5回は、ト音譜表のカード、第6回から第10回はヘ音譜表のカードを音域ごとに分け、教員が該当するカードを無作為に提示した。第5回と第10回は、ト音譜表、ヘ音譜表それぞれ21枚の中から教員が任意で選び、無作為に提示した。

表2 音符カード指導内容

No.	実施日	カードの内容	枚数
1	H27.4.28	一点ハ～一点ロ	7枚
2	H27.5.12	二点ハ～二点ト	5枚
3	H27.5.19	二点イ～三点ホ	5枚
4	H27.5.26	へ～ロ(ト音記号)	4枚
5	H27.6.2	ト音記号(1から4)の復習	21枚から抜粋
6	H27.6.9	へ～一点ハ(ヘ音記号)	5枚
7	H27.6.16	一点へ～ホ	7枚
8	H27.6.23	一点二～一点ト(ヘ音記号)	4枚
9	H27.6.30	一点い～ほ	5枚
10	H27.7.7	ヘ音記号(6から8)の復習	21枚から抜粋

## 4 指導法Ⅱ

### 一特に読譜を苦手とする学生を対象とした指導一

## （1）目的

指導法Ⅰで述べたように、学生全体として音符カードを用いて瞬時に音を読む指導法を用いたが、読譜力の低い学生に対しては、迅速さを求めるよりまずは音を正確に読む訓練が必要である。このことから本指導では、学生が読譜プリント問題を解くことによって読譜に対する意識を高め、確実に音符を読めることを目的とした。また読譜トレーニングのためのプリント問題では、ト音譜表とヘ音譜表それぞれの「線と間の音の指導法」<sup>6)</sup>に着目して問題を作成することで、視覚的な面からも読譜力が定着することを期待した。

## （2）方法

対象は、読譜力調査<sup>3)</sup>でト音譜表またはヘ音譜表の正解数が20問中6問以下の学生、44名<sup>12)</sup>とした。対象学生には、授業の内12回の授業を利用して読譜トレーニング問題のプリント（以下「読譜プリント」）を配布した。学生は各自で時間を計りながら問題を解答し、授業内に「読譜プリント」を提出した。

正確に音を読み取る訓練であるため、時間的な制約は求めなかったが、学生自身が時間を測ることにより短時間で読譜を行うことを目指すよう促した。「読譜プリント」の指導内容は表3のとおりであり、実際に配布したプリントの内容が図1である。

表3 読譜プリント指導内容

No.	プリント	実施日	要項	内容 ト音譜表	内容 ヘ音譜表
1	読譜1	H27.4.28	良く出てくる音	一点ハ～一点ト	へ～一点ハ
2	読譜2	H27.5.12	線の音①	一点ハ～二点二	は～へ
3	読譜3	H27.5.19	線の音②	二点二～三点ホ	へ～一点ト
4	読譜4	H27.5.26	線の音③	へ～一点ト	一点い～ろ
5	読譜5	H27.6.2	間の音①	一点二～二点ホ	へ～ト
6	読譜6	H27.6.9	間の音②	二点ハ～三点二	ホ～一点へ
7	読譜7	H27.6.16	間の音③	ト～一点イ	ろ～ハ
8	読譜8	H27.6.23	加線の音①	二点イ～三点ホ	一点ハ～一点ト
9	読譜9	H27.6.30	加線の音②	へ～一点ハ	一点い～ほ
10	読譜10	H27.7.7	線の音 復習	へ～三点ホ	一点い～一点ト
11	読譜11	H27.7.14	間の音 復習	ト～三点二	ろ～一点へ
12	読譜12	H27.7.21	総復習	へ～三点ホ	一点い～一点ト

**読譜プリント1 H27.4.28**



**読譜プリント2 H27.5.12**



**読譜プリント3 H27.5.19**



**読譜プリント4 H27.5.26**



**読譜プリント5 H27.6.2**



**読譜プリント6 H27.6.9**



**読譜プリント7 H27.6.16**



**読譜プリント8 H27.6.23**



**読譜プリント9 H27.6.30**



**読譜プリント10 H27.7.7**



**読譜プリント11 H27.7.14**



**読譜プリント12 H27.7.21**



図1 読譜プリント1～12

問題は、ト音譜表、ヘ音譜表それぞれ20問ずつとした。第1回では、ト音譜表、ヘ音譜表ともに五線内の音で使用される頻度の高いものを対象とし、ランダムに出題した。第2回から第4回では「線の音」をテーマに、ト音譜表、ヘ音譜表それぞれ下第三線の音（ト音譜表ヘ音、ヘ音譜表一点い音）から上第三線の音（ト音譜表三点ホ音、ヘ音譜表一点ト音）の線上に位置する音を出題した。そして第5回から第7回では、「間の音」をテーマに、ト音譜表、ヘ音譜表それぞれ下第三間（ト音譜表ト音、ヘ音譜表ろ音）から上第三間（ト音譜表三点ニ音、ヘ音譜表一点ヘ音）の間に位置する音を出題した。続いて第8回と第9回では、「加線の音」をテーマに、ト音譜表、ヘ音譜表それぞれ下第三線（ト音譜表ヘ音、ヘ音譜表一点い音）から上第三線（ト音譜表三点ホ音、ヘ音譜表一点ト音）までの五線以外の音を出題した。

指導対象者が授業欠席などの理由で授業内に全て「読譜プリント」を実施できなかった学生もいたが、その場合は、宿題という形で課題を行わせた。

## 5 終了後調査

### （1）方法

指導法Ⅰと指導法Ⅱの効果を客観的に把握するため、平成27年8月4日（火）に終了後調査<sup>9)</sup>を実施した。対象者は、読譜力調査<sup>3)</sup>と同様に「音楽1」履修学生計175名である。

### （2）結果

#### ① 全学生の結果

読譜力調査<sup>3)</sup>と終了後調査の結果をまとめたものが表4である。結果を比較してみると、ト音譜表では、6問以下の正解者数9名（5.1%）が2名（1.1%）に減少、7問以上10問以下の正解者数が25名（14.3%）から1名（0.6%）に、11問以上15問以下の正解者数が47名（26.9%）から10名（5.7%）に激減したことがわかった。また16問以上の正解者数は、94名（53.4%）から162名（92.6%）と大幅に上昇し、なかでも、満点の学生は、53名（30.2%）から102名（58%）へとほぼ倍増したことが明らかになった。またヘ音譜表では、6問以下の正解者数が43名（24.5%）から0名、10問以下の正解者数も85名（48.6%）から20名（11.4%）へと大きく減少させることができた。そして、16問以上の正解者数は32名（18.3%）から99名（56.5%）と大幅に上昇した。なかでも満点の学生は、12名（6.8%）から49名（28%）と約4倍になった。

表4 調査結果

読譜正解数	ト音譜表(読譜力)	ト音譜表(終了後)	ヘ音譜表(読譜力)	ヘ音譜表(終了後)
6問以下	9名	2名	43名	0名
7問以上10問以下	25名	1名	42名	20名
11問以上15問以下	47名	10名	58名	56名
16問以上20問以下	94名	162名	32名	99名
合計	175名	175名	175名	175名

#### ② 特に読譜を苦手とする学生の結果—指導法Ⅱを受けた学生

指導法Ⅱの対象学生44名（あ～わ）の読譜力調査と終了後調査の結果は、表5のとおりであった。この結果から、対象の学生全員が指導によって正解数を増やしていることがわかった。特

に、学生『た』、『ち』、『つ』は、へ音譜表の正解が0問から20問へと大幅に増え、読譜力を向上させたことが明らかになった。

### ③ 指導法Ⅱの対象から外れた学生の中で、読譜を苦手する学生の結果

指導法Ⅱにどれほど効果が認められるのかを検証するために、読譜を苦手とするが、読譜力調査<sup>3)</sup>ではト音譜表、もしくはへ音譜表の正解数が7問以上10問以下であったために、指導法Ⅱより外れた学生42名（ア～レ）の読譜力調査と終了後調査<sup>9)</sup>結果を表6にまとめた。そして、特に読譜が苦手であり指導法Ⅱを行った学生と、読譜を苦手とするが指導法Ⅱから外れた学生の調査結果の比較を試みるために、表5と表6から平均正解数を算出した。その結果は表7の通りである。

表5 調査における正解数(読譜力調査で正解数6問以下の学生)

学生	ト音譜表(読譜力)	ト音譜表(終了後)	へ音譜表(読譜力)	へ音譜表(終了後)
あ	10	20	4	14
い	9	18	6	12
う	3	19	3	13
え	17	20	3	13
お	9	19	0	11
か	3	16	4	13
き	9	18	5	9
く	7	19	0	17
け	13	20	6	19
こ	6	20	13	15
さ	10	20	2	10
し	8	15	0	10
す	12	13	0	12
せ	12	15	0	13
そ	20	20	4	20
た	7	20	0	20
ち	17	20	0	20
つ	15	20	0	20
て	6	10	1	10
と	8	19	0	8
な	11	18	4	17
に	15	18	2	16
ぬ	14	19	0	18
ね	15	13	4	7
の	6	19	3	9
は	2	19	5	18
ひ	5	20	3	12
ふ	15	20	2	11
へ	3	18	0	12
ほ	14	19	2	18
ま	13	20	6	13
み	7	20	6	14
む	15	18	6	20
め	10	20	1	11
も	14	20	0	17
や	12	17	0	7
ゆ	11	19	5	19
よ	4	15	6	11
ら	11	18	0	13
り	10	18	5	10
る	8	19	0	14
れ	8	16	1	7
ろ	9	17	4	12
わ	9	13	1	13

表6 調査における正解数(読譜力調査で正解数7問以上10問以下の学生)

学生	ト音譜表(読譜力)	ト音譜表(終了後)	へ音譜表(読譜力)	へ音譜表(終了後)
ア	9	19	8	8
イ	8	15	10	9
ウ	9	18	11	18
エ	11	19	8	15
オ	10	16	8	15
カ	20	20	10	18
キ	13	20	8	12
ク	20	20	10	10
ケ	11	14	7	15
コ	19	20	8	9
サ	10	12	8	7
シ	18	18	8	15
ス	14	20	7	12
セ	15	20	8	11
ソ	14	19	7	7
タ	19	19	9	20
チ	19	20	10	18
ツ	20	20	10	17
テ	13	19	8	12
ト	20	19	8	20
ナ	12	10	8	17
ニ	20	18	8	14
ヌ	19	20	9	17
ネ	8	0	7	11
ノ	18	20	9	14
ハ	20	20	10	19
ヒ	19	20	8	14
フ	13	15	8	10
ヘ	18	20	10	14
ホ	14	18	9	9
マ	20	20	10	20
ミ	9	20	10	20
ム	17	20	7	20
メ	14	18	10	15
モ	12	20	9	13
ヤ	14	20	9	16
ユ	15	20	8	19
ヨ	12	20	9	19
ラ	15	20	7	9
リ	12	19	8	12
ル	10	17	8	13
レ	9	2	10	11

表7 読譜正解数の平均値

	ト音譜表(読譜力)	ト音譜表(終了後)	へ音譜表(読譜力)	へ音譜表(終了後)
指導Ⅱ対象学生	10.1	18.1	3.5	12.6
正解数7問以上10問以下の学生	13.1	17.9	5.6	13
全体	15.1	18.7	10.1	16

これら両者の読譜力調査<sup>3)</sup>の結果では、ト音譜表の問題の平均正解数が15.1問（正解率75.5%）であった。指導法Ⅱの対象者の平均正解数は10.1問（正解率50.5%）、正解数が7問以上10問以下の学生の平均正解数は13.1問（65.5%）と全体の平均正解数以下であり、これらの学生は<読譜を苦手とする学生>であるといえる。ヘ音譜表では、平均正解数が10.1問（50.5%）、指導法Ⅱの対象者の平均正解数は、3.5問（17.5%）、正解数が7問以上10問以下の学生の平均正解数は5.6問（28%）と全体的に低い数値であった。指導法Ⅱの対象者や正解数が7問以上10問以下の学生は、ヘ音譜表の読譜が特に苦手とわかった。

終了後調査<sup>9)</sup>では、ト音譜表の問題の結果では、全体の平均正解数が18.7問（93.5%）、指導法Ⅱ対象者の平均正解数が18.1問（90.5%）、7問以上10問以下の学生であった学生の平均正解数が17.9問（89.5%）であった。ヘ音譜表では、全体の平均正解数が16問（80%）、指導法Ⅱ対象者の平均正解数が12.6問（63%）、7問以上10問以下の学生であった学生の平均正解数が13問（65%）と読譜力調査<sup>3)</sup>と比較すると飛躍的に向上した。

特に読譜が苦手であった指導法Ⅱの対象学生と読譜が苦手でありながら指導法Ⅱの対象から外れた学生について比較した結果、ト音譜表において指導を受けなかった学生は平均13.1問から平均17.9問と平均正解数が1.37倍の上昇率であるが、指導Ⅱの受講者は平均10.1問が平均18.1問と1.8倍の上昇率となり、指導を受けなかった学生の平均正解数を越した。またヘ音記号においても指導Ⅱから外れた学生の平均点は5.6問から13問と2.3倍と飛躍したが、指導Ⅱ対象者の平均正解数は3.5問から12.6問と3.6倍の上昇率で読譜力を向上させたことが明らかになった。

## 6 考察

### —指導後の読譜力調査を踏まえて—

指導法Ⅰでは、履修学生全体の読譜力向上を図るために、瞬時に音の判別ができる訓練を行い、正確な読譜力を習得させることを目的としてきた。終了後調査では、ト音譜表、ヘ音譜表それぞれの五線に加線が上下第三線までのト音譜表問題20問、ヘ音譜表問題20問を、解答時間が各1分間という制約のもと実施した。これには瞬間的に音を正確に読む力が必要である。本調査結果より全学生の読譜力向上が明確に表れた。このような結果が出たことは、指導法Ⅰの効果があったということがいえるであろう。

また指導法Ⅱでは、読譜の正確性を求めたため、12回の「読譜プリント」の解答には時間制約を設けなかった。すると、ヘ音譜表や加線の音の読譜が苦手な学生は、始めの頃は時間をかけてでも正確に読むように意識し、少し慣れてきたら速く読むことに挑戦し、不正解が多いと再度正確性を求めるなど、学生が自分なりのテーマを毎回設定したようであった。その結果、時間をかけないで解答した時は不注意な間違いの解答も多かったが、次第に不正解数は減少し、正解数が増加していった。また正確に解答しようとするために慎重になりすぎ長い時間を掛けていた学生も、少しずつ時間の短縮がみられた。

読譜の苦手な学生は毎週「読譜プリント」を実施することにより、正解数や時間の短縮を視覚的に知ること、少しずつではあるが読譜力の向上を各自で感じ、読譜に対する意欲を持ち続けることができたと考える。特に前節で述べた、<読譜を苦手とする学生>と<特に読譜を苦手とする学生>との調査結果の比較により、指導法Ⅱは、読譜力向上のための効果的な指導法であったということがいえるであろう。今回は採点や指導にかかる時間について現実的な問

題があり、指導法Ⅱの対象者を正解数6問以下の学生44名としたが、今後、学生全体として読譜力向上を目指すためには、対象学生を増やして指導を行うことも考えるべきであろう。さらに、指導法Ⅰと指導法Ⅱの相乗効果を期待するためには、提示する音を共通なものにすることも察せられる。これらは今後の課題とし、更なる工夫と検証を重ねていきたい。

## 7 結語

これまで述べてきたとおり、本年度は「線と間の指導法」<sup>6)</sup>と「読譜フラッシュ指導法」<sup>7)</sup>に注目し、効果的な指導法として授業担当教員全員で実践した。この視覚的判断を行う訓練の「線と間の指導法」と瞬時に読譜を行う「読譜フラッシュ指導法」は、どちらも平成24年度「音楽1」の授業担当各教員独自に任された指導として行われたものである。本論では、これらの指導法を本年度履修学生全員に範囲を広げて検証した。

学生、指導教員ともに時間的に負担の少ない範囲で、しかもより効果的な指導が必要と考え、今回はこの音符カード<sup>10)</sup>を使用した「読譜フラッシュ指導法」を実践した。

終了後調査<sup>9)</sup>により、履修学生全員が読譜力の向上が認められたが、ト音譜表の正解率9割に比べて、ヘ音譜表では向上したとしても8割であり、ヘ音譜表の読譜が依然として苦手であると言える。このことから、今後はヘ音譜表の読譜力向上のための研究を行っていく課題が見つかったと言えよう。

指導法Ⅱでは、劇的に＜特に読譜を苦手とする学生＞への読譜力の効果があったと言える。しかし、これを全履修学生に導入するには、教員への負担増加が見込まれ、＜読譜を得意とする学生＞にとっては、逆に余分な指導となってしまう、「音楽1」の授業へのモチベーションが下がることも予測できる。＜読譜を得意とする学生＞へは、更に能力を高めるための何らかの課題を模索することが今後の課題の一つとして言えよう。

指導法Ⅱでは、正解率が25%以下の学生を対象としたが、この線引きを30%以下にするのか、40%以下にするのかの判断基準が難しかった。終了後調査の結果により、指導法Ⅱの対象者と正解率50%以下の学生では結果がほぼ同じであったということは、＜特に読譜を苦手とする学生＞を＜苦手とする学生＞のレベルまで引き上げた程度であったとも考えられる。今回の指導法Ⅱから外れたが、＜読譜を苦手とする学生＞へも何らかの指導が必要であったかもしれない。これらのことも含めて読譜力の育成に取り組むための反省として考える必要がある。

指導法Ⅱの取り組みからもわかるように、読譜力向上には、読譜を常に継続することが必要である。「音楽1」で指導を終了した＜読譜を苦手とする学生＞へは、ピアノ実技における日々の取り組みの中で、『楽譜を見ながら弾く』ということを継続していくことが、読譜力を維持できる手段の一つであると説かねばならない。何故なら、＜読譜を苦手とする学生＞は、練習を積み重ねるうちに運指を覚えてしまい、楽譜を見ないで演奏をする習慣に陥ってしまうからである。これは、折角身についた読譜力をみすみす手放してしまうことになり、新しい曲を弾く時の読譜力に結び付けるチャンスを逃すことになる。近年、保育職の就職試験では初見演奏を課題としている所がみられるようになってきた。ピアノ演奏には暗譜演奏法も大切であるが、＜読譜を苦手とする学生＞へは、楽譜を見て演奏することを習慣付けさせる指導も今後の課題の一つ言えよう。

「音楽1」ではバイエル教則本の課題を中心としたピアノ技術習得の授業を行っている。個々



の能力に差があるのは言うまでもないが、学生は課題曲を練習する際、演奏の第一歩として譜面上の音の高さと長さを瞬時に把握する必要がある。楽典の理解と読譜力の向上がこの作業を円滑にし、相乗効果となってピアノ技術の習得に結びつく。保育者として必要なピアノ技術習得には読譜が避けられないのである。このことを踏まえて「音楽1」の授業では、個々の能力に沿ったきめ細かい指導を実践していかなくてはならない。

多くの課題が見つかった本研究ではあるが、学生への読譜力向上に向けたこれらの指導法の研究は今後も一貫して実施していかなければならない重要な研究である。

## 脚注

- 1) 平成26年度より「音楽理論」の表記を「楽典」と変更。
- 2) アンケート内容については、安藤恭子ほか2012：240 表1 参照。
- 3) オリエンテーション時に行うト音記号譜、ヘ音記号譜の読譜テスト。
- 4) 五線に位置する音の場所。
- 5) フラッシュカードの一種で、視覚的に音符を瞬時に判断する。フラッシュ暗算から派生したこの読譜フラッシュについて、その定義は確立されていない。
- 6) 森ほか 2014：146-149。
- 7) 森ほか 2014：149-153。
- 8) 履修生177名で行ったが、うち2名は第2回の読譜テストを受講しなかったため除外する。
- 9) 授業終了時に行う読譜についてのアンケート調査。内容はオリエンテーション時に行う読譜力調査と同じト音記号譜、ヘ音記号譜の読譜テスト。
- 10) くおん出版『楽しみながら学べるくおんのおんぶカード』株式会社日研。おんぶカードには1枚につき1音が載せられ、ト音カードには、ト音譜表でヘ音（カタカナ表記）から三点ホ音、ヘ音カードには、ヘ音譜表で一点イ音から一点ト音が記されている。
- 11) ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階の呼名、イタリアやフランスでの音名でもある。
- 12) 表1に示した通り、正解数が6問以下の学生はト音譜表9名、ヘ音譜表43名であり、そのうち両方6問以下であった学生が8名いた。

## 参考文献

- 浅香 淳編 1979『新音楽辞典 楽語』第6刷 東京：音楽之友社。
- 安藤恭子、藤田桂子、森久見子 2011『『基礎技能（音楽1）』—読譜—』『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』第57号：265-277。
- 安藤恭子、藤田桂子、森久見子 2012『『保育表現技術（音楽1）』—読譜2—』『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』第58号：239-249。
- 安藤恭子、森久見子 2013『『保育表現技術（音楽2）』—読譜3—』『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』第59号：255-268。
- 森久見子、藤田桂子、小栗美砂、河合玲子、久保田道子 2014『『保育表現技術（音楽1）』—読譜4—』『名古屋女子大学紀要（人文・社会編）』第60号：145-157。

